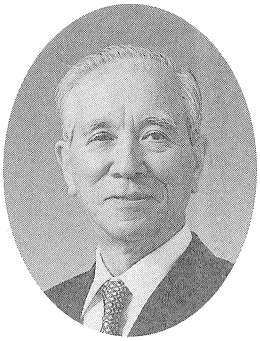
年頭のご挨拶



山本卓眞会長

新年明けましておめでとうございます。

昨年7月10日（土）の靖國神社における大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭には、畏くも当協議会の名誉総裁であられる三笠宮崇仁親王殿下の御台臨を仰ぎ、210名の参拝者及び特別御芳志の在宅参拝者174名と共に、心からなる慰霊の祈りを捧げることができました。殿下の御台臨は、洵に光栄であり、感激の極みであって、実に有り難いことであります。

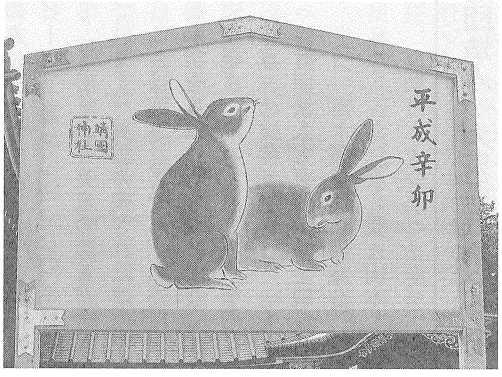
団体会員及び個人会員の皆様には、昨年中各種の慰霊顕彰等の行事に御協力いただき、厚く御礼申し上げます。

首相の靖國神社への参拝を要請し、国立追悼施設建設に反対する公開質問状（6月25日、38団体）と署名運動（英霊にこたえる会、43万余名）、いずれにも各団体に連名を頂きました。しかし、残念ながら靖國神社への閣僚の参拝は皆無で、嘆きを越えて怒りを覚えます。

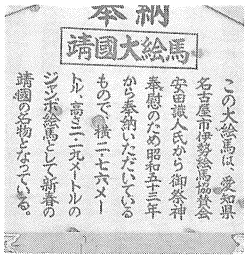
昨年、当協議会には熊本偕行会、全国ソロモン会、陸士53期生会が加入されました。新団体の加入は心強い限りでお礼申し上げますが、全体としては戦争体験者の高齢化に伴う会員の減少は避けられず、今後如何に若い方々を勧誘し、志を継いで頂くかが重要な課題で、知恵を出し、努力をして、新機軸を生み出したいと願っています。会員各位のご意見、ご提案を歓迎いたします。

今後の課題の一つは、各地の慰霊碑の維持保存を如何にするかで、政府の方針と相まって事業を開始したいところですが、財団の資金不足で積立て段階にあり、踏み出せずにいます。遺骨の収集については、政府の方針、他団体の過去の活動状況から当協議会は静観し、要請があれば協力するのが妥当であろうと考えております。また、昨年も記載しましたように、当協議会は法律改定による公益法人の認可を受けるべく準備を進めています。

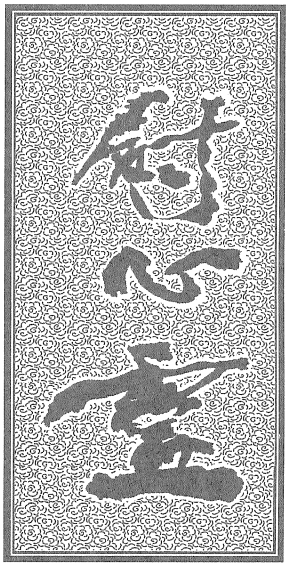
今年も平和のうちに正月を迎えることができましたが、日本周辺の安全保障の環境は厳しく、尖閣諸島、竹島、邦人拉致、北方領土などの問題を抱え、日清、日露の時代にも似た厳しい状況にあります。加えて周辺諸国の核兵器・ミサイル所有、覇権傾向を露にする中国、異様な国北朝鮮、竹島不法占拠を続ける韓国、性悪のソ連に先祖帰りをしたようなロシアと、厄介千万な諸国



靖國神社奉納大絵馬


奉納
靖國大絵馬
この大絵馬は、愛知県名古屋市伊勢絵協会安田眞人氏から御祭神奉慰のため昭和五十三年に奉納いただいているもので、横二七六メートル、高三二九メートルのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。

靖國大絵馬説明札



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 20 号

財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒105-0014　港区芝2-5-19
TAビル4階

電　話　03（5730）0421
ＦＡＸ　03（5730）0422

http://homepage2.nifty.com/ireikyou

振替口座　00140-6-334930

編集人　飯田正能
発行人　柚木文夫
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目次

年頭のご挨拶 …… 1
謹賀新年 …… 2
靖國神社と世界平和 …… 3
海外慰霊碑の現況について …… 5
千鳥ヶ淵戦没者墓苑平成二十二年度
秋季慰霊祭 …… 7
第14回ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭を終えて …… 9
今、何を語らん …… 11
第39回全国海洋戦没者伊良湖岬
慰霊碑追悼式 …… 14
事務局からの報告等 …… 15

に囲まれています。遺憾ながら日本の政府には主権、国益を守る気概も戦略も見るべきものがなく、結果としての弱腰外交に対し国民の支持率が急低下しています。世界での日本の威信も著しく低下したことが報道されています。

東京裁判史観、左翼を中心とする自虐史観、東アジア贖罪意識などGHQの占領政策に洗脳されて未だに覚醒できない階層が、空想的平和主義の下、国家観を失ったまま各界でかなりの要路を占めて日本を弱体化させているのが現状でしょう。尖閣諸島事件を中国は、情報工作と強烈な統制で己を善、日本を非とする世論操作を国家が主導しています。ロシア大統領は、終戦時の国際法違反の数々には素知らぬ顔で、北方領土を我が物と発言して恥ずる気配もありません。多くの日本国民は、憲法前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持」することなど到底できないことを痛感したはずです。この機会に日本の政治家は憲法を現実に即した健全な新憲法に改正すべく熱心に活動して頂きたいと念願します。

尖閣諸島では、他国の漁船多数の領海侵犯、漁網の無法切断などで日本漁業が甚大な被害を受けており、石垣島漁民が陳情をしています。一方、海上保安庁では多数侵入する中国、台湾の漁船に対し、少数の巡視艇では到底防ぐことは出来ず、法制整備による警告射撃を必要とします。昨年以来の日本の媚中外交、普天間で起こした日米安保の亀裂、米国の力の相対的低下による無極化傾向は、以上のように日本の不適切な対応と相まって様々な不都合を生み出してきました。今こそ日本は目覚めて、独立の気概と主権を守る覚悟を固める時です。領海警備法、集団的自衛権の実行、憲法改正を真剣に推進すべきで、皆さんにも声を上げて頂きたいと思います。

「ロシアの『第二次大戦終結の日』制定を非難する」という論説を、昨年偕行誌9月号に掲載しましたが、「史実を世界に発信する会」が英語に翻訳し、インターネットで世界に発信してくれました。一方、産経新聞（22・11・3）によれば、欧州議会のグレアム・ワトソン議員は「北方領土は第二次大戦でソ連に武力で奪われたが、現在も間違いなく日本の領土だ。問題を平和的に解決するようロシアに圧力をかける必要がある」と欧州と日本の連携を呼び掛けた。国際法も道義も無視するロシアに対し、息長く国際世論を起こし国際戦略を展開して日本の主権と道義を守り抜くべきでしょう。

大東亜戦争において、二六〇万余の英霊は、日本の自衛だけでなくアジアの独立、共栄のために命を捧げられ、「日本は大東亜共栄圏に含まれた国々の為に偉大な歴史を残した」（トインビー）、「最後に勝ったのは日本だ」（ドラッガー）と英米の論者が書き記しています。英霊の残された遺志を損なうことは許されません。私達は慰霊顕彰事業を真摯に行うだけでなく、その志を継ぎ、道義を貫く責務があります。

平成二十三年元旦

財団法人大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会
会　長　山本　卓眞

謹賀新年

財団法人　偕行社

会　長　山本卓眞
副会長　齋須重一
同　塩田章
同　志摩篤
理事長　福田一彌
事務局長　菊地勝夫

財団法人　水交会

会　長　林崎千明
理事長　夏川和也
副理事長　袈岩壮吉
専務理事　藤田幸生
事務局長　池邑正男

航空自衛隊退職者団体　つばさ会

会　長　村木鴻二
副会長　杉山弘
同　横幕功
同　山本修三
同　竹河内捷次
専務理事　山本隆之
副専務理事　小鹿勝見

財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

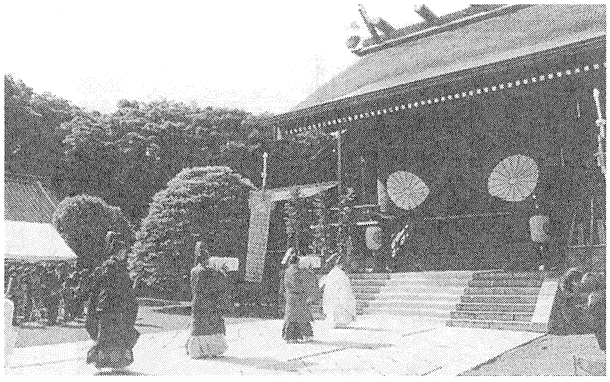
会　長　山本卓眞
副会長　岩下邦雄
同　齋須重一
理事長　柚木文夫

靖國神社と世界平和

○靖國神社秋季例大祭

昨平成22年、御創立百四十一年目を迎えた靖國神社では、秋季例大祭が、10月17日から20日まで4日間にわたり厳粛盛大に齋行された。17日午後7時には、浄闇の中「第百三十五回霊璽奉安祭」が厳かに齋行され、新たに十七柱の神霊が御本殿正床に奉遷された。

この日午前8時には「みんなで靖國神社に参拝する国会議員の会」（古賀誠会長）の衆参両院議員129名（代理を含む）が参拝した。



勅使参向

翌18日の午前10時から齋行された「当日祭」には、古賀誠日本遺族会会長以下各崇敬者総代、自衛隊関係者等を始め招待者677名が参列し、国歌斉唱の後、國學院大学吹奏楽部が奏する「国の鎮」が流れる中、御内陣の御扉が開かれ、海山川野の各種神饌が献上され、京極宮司が祝詞を奏上した後、午前10時30分、参列者が奉迎申し上げる中、北島清仁掌典が勅使として参向、御幣物を奉献し、大御心のまにまに御祭文が奏上された。

また、この日午後1時半、寛仁親王殿下が到着殿に御参着、昇殿の上、玉串を捧げて拝礼され、拝殿では、遺族や崇敬者等に御会釈を賜った。

京極宮司挨拶

翌19日の「第二日祭」には阿南惟正崇敬者総代を始め、招待者等801名が参列し、最終日20日の「第三日祭」にも、小田村四郎崇敬者総代を始め、招待者等1017名が参列して、それぞれ神儀等が齋行され、終わって、京極宮司が挨拶を申し述べられたが、その中で特に、皇室の靖國神社にお寄せ下さる格別の御芳情には、御祭神のお慶びは固より、御遺族他参列者並びに祭典奉仕に携わるもの一同感激の極みであることを強調され、また、特に平成22年が、明治23年に明治天皇より「教育に関する勅語」が御下賜されてより百二十年の記念すべき年に当たるので、10月30日に「教育勅語渙発百二十周年記念祭」を御奉仕申し上げ、我が国において著しく低下している倫理道徳観、教育現場は固より地域社会や家庭における深刻な問題など、今こそ教育勅語の精神を再確認し、道義の国日本再生のために、邁進しなければならない旨を強調された。

更に、昨年の靖國神社御創立百四十年を記念しての各種事業も滞りなく完了したが、最終の事業である研修施設「啓照館」が昨年3月に竣工し、同施設を拠点として「やすくに活世塾」の年間講座が順調に開催され、若者を中心とした多くの受講者が参加し、英霊の奉慰顕彰と我が国の真姿顕現に寄与し得る人材育成の成果が徐々に現れつつあることは、御同慶の至りである、と述べられた。

○靖國神社境内摂社「鎮霊社」御創建の主旨とその祭祀

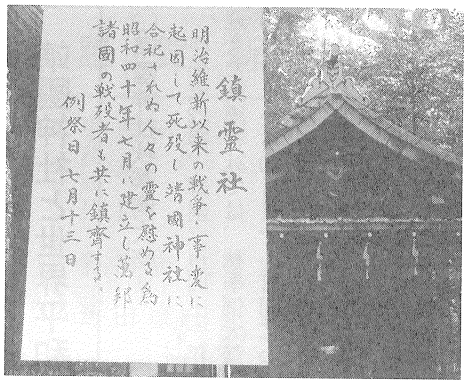
靖國神社御本殿に祀られている霊璽簿記載の御祭神は、嘉永6年（1853年）の黒船来航以来二四六万六千余柱であり、その中には女性五万七千余柱、当時日本人であった朝鮮、台湾の出身者八万余柱も含まれている。

また、御本殿内の相殿には、内々陣へお遷しするまでの御霊（千鳥ケ淵戦没者墓苑の御遺骨を含む）が祀られているから、当然、慰霊・祭祀の対象となっている。したがって、靖國神社には、戦死又は戦病死した軍人・軍属（従軍看護婦・船員・報道員等）を始め、準軍属（民間防空員・勤労動員学生・女子交換手等）や国の為に殉じた幕末の志士、法務死者（靖國神社では「昭和殉難者」と称されている）等の方々も祀られている。

更にまた、靖國神社拝殿の左手の柵門を入ると銀杏の大木などに覆われて昼なお暗き一角（拝殿から御本殿に向かう左側の回廊の外側）に、二つの摂社が並んで鎮座しますが、その右が

「元宮」、左が「鎮霊社」である。「元宮」は、文久3年（1863年）に、幕末の志士の御霊を、幕府にかくれてお祀りするため、少数の有志により京都に建立された招魂社の元をなす小祠で、昭和6年に奉納鎮座された。

鎮霊社



鎮霊社立札

その左側の「鎮霊社」（昭和40年御創建）には、西南の役などの国内戦で賊軍となり、戦没された方々（西郷隆盛他）並びに全民間の戦禍犠牲者の御霊と共に、国籍を問わず万国（米・英・仏・支他）の戦没者・戦禍犠牲者の御霊が祀られている。

この二社は、宮司始め神社職員により、毎日の御勤めが行われている。したがって、千鳥ケ淵の戦没者墓苑にお預かりしている御遺骨も、将来にわたって収集の術のない空中散華者や海底深く眠る御遺骨も、また、それぞれの墳墓に眠る御遺骨も、全てその御霊は靖國神社に祀られているのである。のみならず、日本と戦って亡くなられた敵方の戦没者はもちろんのこと、今も世界中のどこかで戦争をしており、その戦没者が毎日のようにあり、国籍、民族、宗教を問わず、祀られ続けているのである。

なお、右の「鎮霊社」入口の立札には、次のように掲記されている。

「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齊する。

例祭日　七月十三日」

ところで、その「鎮霊社」が昭和40年7月創建されたについて、当時の靖國神社の筑波宮司は、もともと皇族の御出身であられたが、宮司になられて20年の頃、御夫妻でヨーロッパの宗教者会議に出席され、帰国後間もなく「鎮霊社」を創建されたとのことで、設立主意についての細かい記録は存在しないため、靖國神社崇敬奉賛会員の中にも、御祭神が不特定多数であることから、靖國神社の御祭神は、英霊のみで十分であるとして、反対の方もおられるが、筑波宮司が世界の多くの宗教者に会われて、世界平和を実現するために、日本に、そしてまた、靖國神社に出来ることはこれだと決断されたものと思われる、と「英霊の志を継承する会」を主宰し、その精神的基盤を、神武創業、更に遡れば天照大御神の日本建国の精神であり、代々の天皇に引き継がれ、靖國の英霊が一命を捧げられた「八紘一宇」（世界平和）の精神に置くことを主張されている宇井豊会長（陸士59期）は言っておられる。

そしてまた、同会長は、科学者で哲学者でもあったアインシュタインも、哲学者のポール・リシャルも、世界平和を達成させることが出来るのは、日本人しかいないと期待した。それが達成されるまで、「鎮霊社」は休むことなく御祭神を増やし続けるであろう。靖國神社は、本殿に祀られている英霊の慰霊・顕彰を行うと同時に、鎮魂のために世界平和を祈念する施設でもある、と強調しておられる。

そのことに関して故名越二荒之助先生は、遺著『史実が語る日本の魂』の中の「世界宗教サミットの提唱」と題する論考の中で「日本人はどうして靖國論争に巻き込まれるのか。靖國神社は、世界のどこにもない日本の伝統的信仰で祀っているから、すばらしいのだ。世界各国は、伝統的信仰の原点を見失っている。そのため味気ない宗教上の論争が絶えないし、宗教論争が今も続いている。そもそも他の宗教と喧嘩する宗教は、偏狭なる邪教ではないか。邪教ばやりの世界に向かって、日本人の汎神的宗教観を発信せよ。

現在の世界は、経済サミットや政治サミットで忙しい。神社本庁あたりから世界に向けて『宗教サミット』を呼びかけたらどうか。新・旧のキリスト教、イスラム教（シーア派・スンニー派）、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教等の代表者に集まってもらって、宗教や信仰の原点は何か、相互理解を促すべきではないか」と主張しておられる。

海外慰霊碑の現況について

理事長　柚木　文夫

先の大東亜戦争において、我が国はアジアの全域で戦った。それらの諸戦域において斃れられた多数の戦没者の偉業を称え、御霊を慰めるために、多くの慰霊碑が、それぞれの戦場に建立されている。特に、数多の戦友会、部隊会等によって建立された海外慰霊碑の去就は、今後、我々が心して取り組まねばならない問題と考える。

本件に関し、当協議会が把握している現況の概要を紹介し、今後の取組みの資としたい。

一　国立慰霊碑

国は、昭和46年の『硫黄島戦没者の碑』建立を契機に、遺族の心情及び相手国の国民感情を勘案しつつ、海外の主要戦域に本格的な慰霊碑を建立することを決定した。それ以降、「一国又は一戦域ごとに一碑」を原則として、当該地域の中心的な地点に計画的に建立が進められ、これまでに硫黄島、沖縄を含めると、別表1のとおり、計16カ所に国立慰霊碑が建立されている。

なお、このほか、旧ソ連地域については、抑留中死亡者のための小規模慰霊碑が6カ所に建立されている。

二　民間建立慰霊碑

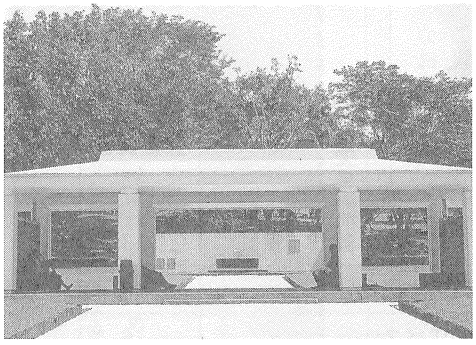
前記国立慰霊碑のほかに、海外の各戦跡には、大東亜戦争を戦った各戦友会、部隊会等によって建立された慰霊碑（いわゆる民間建立慰霊碑）が多数存在する。平成12～18年にかけて厚生労働省が（財）偕行社などの民間団体等に委託して行った調査結果によれば、別表2のとおり、681カ所に慰霊碑が存在するとのことである。

これらの慰霊碑は、各戦友会等が私財を投じて建立し、継続的な参拝行脚と地元との関係持続などの民間努力によって維持されてきたものであるが、今日、長年月を経て、会員の高齢化・他界、あるいは現地関係者の世代交代等により、維持管理が次第に困難となりつつある。もちろん、涙ぐましい努力によって見事に維持管理されている例も多々あるが、それすら今後の永続の見通しとなると、余談を許さないものがある。相手国への配慮も必要である。

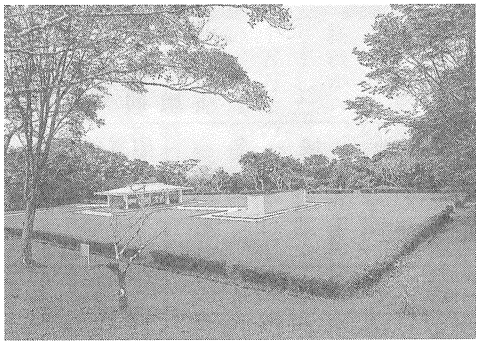
厚生労働省では、維持管理が困難となった慰霊碑については、必要に応じ適切な整理作業（移設・埋設など）を行うとの指針を打ち出しているが、その整理作業のためには、建立団体等の意向確認が必要であり、その意向確認そのものが容易でないと聞く。

これら海外民間慰霊碑を、今後どのように維持管理していくか、又は整理していくか、慰霊諸団体として、あるいは協議会として検討すべき課題は多い。各方面のご指導ご助言をお願い申し上げる次第である。

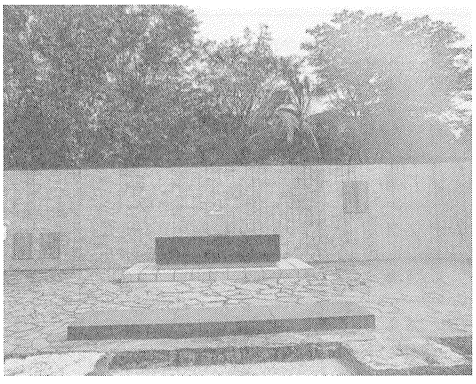
国立慰霊碑と民間建立慰霊碑整理の一例



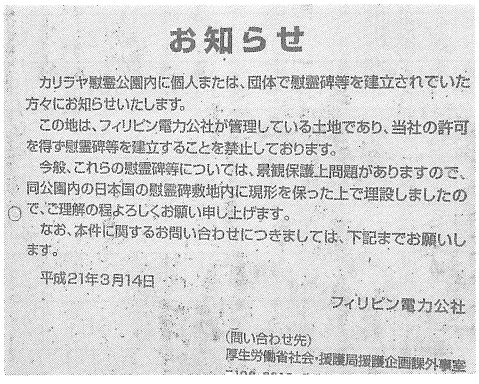
カラリヤ国立慰霊碑と休憩所



フィリピン・カラリヤ慰霊公園全景



国立比島戦没者の碑



お知らせ

カリラヤ慰霊公園内に個人または、団体で慰霊碑等を建立されていた方々にお知らせいたします。

この地は、フィリピン電力公社が管理している土地であり、当社の許可を得ず慰霊碑等を建立することを禁止しております。

今般、これらの慰霊碑等については、景観保護上問題がありますので、同公園内の日本国の慰霊碑敷地内に現形を保った上で埋設しましたので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

なお、本件に関するお問い合わせにつきましては、下記までお願いします。

平成21年3月14日

フィリピン電力公社

（問い合わせ先）
厚生労働省社会・援護局援護企画課外事室

民間建立慰霊碑整理の立札

別　表　1

国　立　戦　没　者　慰　霊　碑　の　状　況

No.	慰霊碑の名称	所　在　地	竣工年月日
1	硫黄島戦没者の碑	東京都小笠原村硫黄島	昭和46. 3.26
2	比島戦没者の碑	フィリピン共和国 ラグナ州 カリラヤ	〃 48. 3.28
3	中部太平洋戦没者の碑	アメリカ合衆国（自治領）北マリアナ諸島サイパン島 マッピ	〃 49. 3.25
4	沖縄戦没者墓苑	沖縄県糸満市摩文仁	〃 54. 2.25
5	南太平洋戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東ニューブリテン州	〃 55. 9.30
6	ビルマ平和記念碑	ミャンマー連邦 ヤンゴン市	〃 56. 3.28
7	ニューギニア戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東セピック州 ウエワク市	〃 56. 9.16
8	ボルネオ戦没者の碑	マレーシア サバ州 ラブアン市	〃 57. 9.30
9	東太平洋戦没者の碑	マーシャル諸島共和国 マジュロ島 マジュロ	〃 59. 3.16
10	西太平洋戦没者の碑	パラオ共和国 ペリリュー州 ペリリュー島	〃 60. 3. 8
11	北太平洋戦没者の碑	アメリカ合衆国 アラスカ州 アッツ島（アリューシャン列島）	〃 62. 7. 1
12	第２次世界大戦慰霊碑	インドネシア共和国 パプア州 ビアク島パライ	平成 6. 3.24
13	インド平和記念碑	インド共和国 マニプール州 インパール市 ロクパチン	〃 6. 3.25
14	日本人死亡者慰霊碑	ロシア連邦 ハバロフスク州 ハバロフスク市	〃 7. 7.31
15	樺太・千島戦没者慰霊碑	ロシア連邦 サハリン州（樺太）スミルヌイフ	〃 8.11. 1
16	日本人死亡者慰霊碑	モンゴル国 ウランバートル市	〃 13.10.15

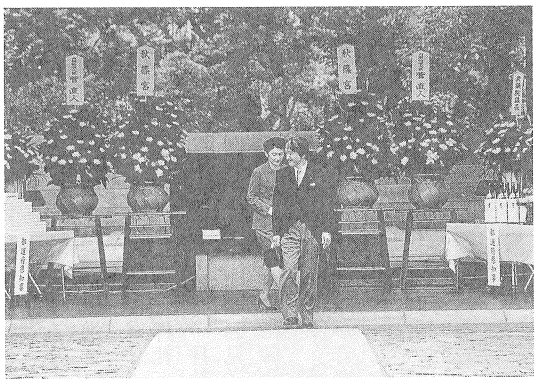
別　表　2

海　外　民　間　建　立　慰　霊　碑　の　状　況

No.	地　域　名	慰霊碑数	No.	地　域　名	慰霊碑数
1	タイ	28	13	グアム島	17
2	マレーシア	9	14	ミクロネシア	13
3	シンガポール	17	15	パラオ諸島	48
4	インドネシア	52	16	キリバス	6
5	ミャンマー	110	17	マーシャル諸島	1
6	インド	2	18	中国	4
7	フィリピン	164	19	台湾	7
8	パプア・ニューギニア	36	20	韓国	1
9	ソロモン諸島	21	21	ロシア	57
10	オーストラリア	1	22	カザフスタン	5
11	ニュージーランド	1	23	ウズベキスタン	16
12	サイパン島・テニアン島	64	24	モンゴル	1
				合　計	681

千鳥ケ淵戦没者墓苑
平成二十二年度秋季慰霊祭
（財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会

千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会主催の平成二十二年度秋季慰霊祭が、平成22年10月18日（月）、澄みわたる秋空のもと秋篠宮文仁親王、紀子妃両殿下の行啓を仰ぎ、内閣総理大臣（代理）、厚生労働、環境、防衛、各大臣（代理）、自民、公明、たちあがれ日本各党の代表等の参列を頂き、厳粛、盛大に執り行われた。



御拝礼を終えられた秋篠宮、同妃両殿下

この日、六角堂には、秋篠宮、同妃両殿下御下賜の大花籠が飾られ、その両側には内閣総理大臣、衆参両議院議長、最高裁判所長官、各省大臣、各都道府県知事他各方面からの生花及び供物が整然と供えられた。

定刻午後一時、秋篠宮、同妃両殿下が御臨場、式典は開始された。

参列者全員による「君が代」斉唱の後、表千家流・菅沼豊子先生による献茶の儀が行われ、次いで宮下創平墓苑奉仕会会長が式辞を奏上した。

宮下会長は式辞の中で、終戦六十五年目の節目を迎え、国難に殉じられた戦没者に心からなる感謝と哀悼の誠を捧げると共に慰霊奉賛の灯火を次の世代へ確実に伝えていく旨の強い決意を述べた。

次いで、吉永洲神氏（尺八・岡田純明氏）が昭和天皇の御製を、石橋一歌氏（龍笛・逢坂龍信氏）が今上陛下の御製を朗々と吟じた。続いて児童合唱団「音羽ゆりかご会」の皆さんによる「海ゆかば」等の童謡唱歌があり、御英霊には祖国を想い安らかなお気持ちになられたことと思う。

次いで、菅内閣総理大臣の「追悼の辞」を、古川内閣官房副長官が代読、平和を守り、二度と悲惨な戦争を起こしてはならないとの不戦の誓いを述べ

追悼の辞

本日ここに、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭が挙行されるに当たり、謹んで追悼の言葉を申し述べます。

終戦から、六十五年の歳月が過ぎ去りました。ここに眠っておられる三十五万余の方々をはじめ、祖国を思い、家族を案じつつ、心ならずも戦場に倒れ、戦禍に遭われ、あるいは戦後、異郷の地で亡くなられた数多くの戦没者の方々に心から御冥福をお祈りします。また、最愛の肉親を失われ、決して癒されることのない悲しみを抱えながら、苦難を乗り越えてこられた戦没者御遺族の方々のご労苦に、深く敬意を表します。今なお海外に眠っておられる方々の御遺骨を一日でも早く祖国日本にお迎えすることが政府の責務であると、決意を新たにいたしております。

戦後、私達国民一人一人が努力し、各国・各地域との友好関係に支えられ、幾多の困難を乗り越えながら、平和国家としての途を進んできました。これからも悲惨な戦争の教訓を風化させることなく次の世代に継承していかなければなりません。今一度不戦の誓いを新たにし、戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、世界の恒久平和の確立に全力を尽くしてまいります。

終わりに、皆様方の御平安を心から祈念して、追悼の言葉とします。

平成二十二年十月十八日

内閣総理大臣　菅　直人

昭和天皇御製碑

昭和天皇御製碑
秩父宮勢津子妃殿下揮毫

くにのためいのち
ささげしひと〳〵の
ことをおもへばむねせまり
くる

今上陛下御製碑

今上陛下御製碑
常陸宮華子妃殿下揮毫

戦なき世を
歩みきて思ひ出づ
かの難き日を
生きし人々

られた。

やがて、参列者一同起立するなか、秋篠宮、同妃両殿下は墓前に進まれて拝礼され、続いて黙祷を捧げられた。参列者一同も両殿下と一緒に拝礼・黙祷を行い、慰霊の誠を捧げた。拝礼を終えられた両殿下は、一同がお見送りする中を、御遺族、御来賓等に御会釈を賜りながら御退場になられた。続いて陸海空自衛隊の各代表部隊が音楽隊と共に威容を整えて整斉と拝礼した。その後、御来賓の献花、参列者の焼香と続き、式典は午後二時過ぎ、滞りなく終了した。

宮下奉仕会会長「式辞」

式辞

澄み渡る秋空のもと、本日ここに、秋篠宮、同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、御遺族及び御来賓多数の参列を得て、秋季慰霊祭を挙行できますことは、誠に感激に堪えないところであります。特に本年は、終戦後六十五年目の節目の年に当たり、慰霊祭を挙行致しますことに、改めて感慨を深く致しておるところでございます。

先の大戦におきましては、広大な戦場で数多くの将兵が勇戦敢闘して、戦場に斃れました。また、多くの抑留者が極寒・辺境の地で命を失いました。さらに、少なからざる一般邦人の方々が、戦闘に巻き込まれて、いたましくも命を失いました。その数、二百数十万に及んでおります。これらの方々は、祖国の安泰を願い戦場で敢然と戦いながらも、家族のことを忘れることはなかったでしょう。こうした方々の御遺族の御心情を思うとき、今なお耐え難い胸の痛みを覚えるのであります。

今日私達は、平和で豊かな生活を享受しておりますが、それが戦没者の方々の尊い礎の上に築かれたものであることを忘れてはならないと思います。

ここに、謹んで国難に殉じられた戦没者の方々に心からなる感謝と哀悼の誠を捧げ、御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

我が国は先の大戦で、海外で戦没された方々で、お名前が分からない等のため、御遺族にお渡し出来なかった御遺骨三十五万八千二百六十九柱を、当千鳥ケ淵戦没者墓苑に奉安致しております。御遺骨収容は今なお続けられております。今日未だ海外に眠る御遺骨の一日も早い御帰還を御遺族の皆様と共にお待ち申し上げているところであります。

私ども、財団法人千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会は、発足以来半世紀を過ぎ、微力ながら墓苑を国民的聖地として幅広く且つ末永く戦没者の慰霊奉賛の場とするよう努めて参りました。幸い関係各方面の暖かい御理解も得られ、その実現に御協力を頂いておりますことに、深く感謝申し上げる次第であります。今後とも、慰霊奉賛の灯火を守り、これを力強く次の世代へと伝えるべく努力を続けて参りたいと考えております。この上とも御参列の皆様の格別の御高配と御協力を切にお願い申し上げまして式辞といたします。本日は誠に有り難うございました。

平成二十二年十月十八日

（財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会

会長　宮下　創平

音羽ゆりかご会の皆さん

御製奉誦　石橋・逢坂両先生

御製奉誦　吉永・岡田両先生

第14回ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭を終えて

東京ヤゴダ会
会長（軍校七期）茨木　治人

平成22年11月3日（水）正午より、千鳥ケ淵戦没者墓苑において、第14回ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭が催行された。1991年（平成3年）ソ連が崩壊し、抑留犠牲者の遺骨収集が開始されて、御遺骨が千鳥ケ淵墓苑に納められるようになった平成9年から、この鎮魂慰霊祭が実施されて以来、早くも14回目を迎えることになった。

平成16年、常磐陸士61期生会とJYMA（日本青年遺骨収集団）との共催で実施した「遺烈・遺骨収集展」で、当時の中江仁東葛偕行会会長（陸士61期）の依頼により、軍校七期生の抑留死亡者を中心とするシベリア強制抑留展を、私が担当して開催して以来、学校では教えないソ連抑留の真実を、学園祭での展示・勉強会を通じて学生・青年との交流を深めつつ、この鎮魂慰霊祭にも支援を頂くようになって7年目となる今年は、JYMA学生とそのOB・OGの青年による慰霊祭の開催を発起した。

式次第や進行の要となる司会者を、平成18年大卒の若い女性社会人に引き受けて戴き、「追悼の言葉」は、本年度ロシア・沿海州地方遺骨収集派遣初参加の学生を指名し、遺骨収集に参加して感じたことをそのまま語ればよいと伝えて、本人も了承し、若い世代による慰霊祭実施の第一歩を踏み出すことができた。

また、参列者も、本年度より千鳥ケ淵戦没者墓苑理事長の参列をお願いしたほか、産経新聞論説委員、社会部記者、近代史研究女性ジャーナリスト、『祖国と青年』編集長等若手の来賓を始め、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」、「祖父達の戦争体験をお聞きする孫の会」（佐波優子主宰）の第三世代の若者も増え、来年度以降の足掛かりが出来たと思っている。

「シベリア抑留」という、マスコミにより矮小化された言葉を避け、「ソ連強制抑留」として、ソ連の国際的犯罪、人道として許せない犯罪の真実を第三世代の青年達に伝え、ネット・ブログで青年同士の同じ志を持つ慰霊祭組織を構築したい。今回ネットで知って参加した者は20名であり、全員、今後慰霊祭案内の郵送を希望している。国民参加の慰霊祭実現に向けて更に力を入れて行きたい。

稚拙な鳩山外交で、日米同盟の信頼と絆が弱まり、菅内閣は共産国家への対応を誤り、中・露の両国家が本性を現し、メドベージェフ露大統領は平然と北方領土を戦後始めて訪問し、ロシア通と称する学者は「大統領は次の選挙を控え、ロシアが実効支配している北方四島の重要性を強調し、島民に島の整備を約束した選挙目当ての訪問」と論説する。新聞に反論はなく、楽観視している。共産国家の本質を知らない共産国家擁護の輩が多い。国を挙げて抗議すべきと思うし、悲しいことだが、豊富な水産資源と共に、北方四島の返還は益々難しくなると思う。情けなく、無念なことである。

次に、この鎮魂慰霊祭で、御霊に捧げたJYMAの藤浪達哉君（法政大学四年）の「追悼の辞」と、同じく軍校同期生の菊谷達禰君の「慰霊の言葉」の全文を紹介する。

○追悼の辞

藤浪　達哉

本日、ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭を挙行するに当たり、過ぐる大戦後ソ連に抑留され、過酷な労働下で亡くなられた六万余の英霊の皆様に対し、深く哀悼の意を表します。

私は去る9月1日から17日間、沿海地方ダリネレチェンスクにおいて遺骨収集を行いました。凍土に埋葬されていた御遺骨を初めてお迎えした際、65年という年月の遠さ、異国の土地という遠さを感じました。

収集地は粘土質で、御遺骨をお迎え出来ても、空気に触れた瞬間、崩れてしまい、風に吹かれてしまいました。どうしてもっと早くお迎えに上がれなかったのかと悔恨の念に駆られました。

派遣期間中、私達は一柱でも多くの方々を祖国にお迎えすべく微力を尽くして参りましたが、力及ばず、百十九柱の方々のみしかお連れすることができなかったことは痛恨の極みであり、多くの英霊を残して帰国することは後ろ髪を引かれる思いがしました。しかし、必ず同じ志を持つ青年が残された英霊をお迎えすることを誓います。

そして、英霊、抑留経験者、御遺族の意志を継ぎ、私達学生が、今何をす

べきかを考え、実行し、後世に伝えていくことを誓います。

多くの英霊の皆様の御霊の安らかならんことを心より祈念いたし、追悼の言葉といたします。

平成二十二年十一月三日

ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団

法政大学四年　藤浪　達哉

○慰霊の言葉

菊谷　達禰

本日、戦後65年、第14回の鎮魂慰霊祭で、この墓苑の御霊とお話をする日が参りました。

昭和20年8月15日、私達は終戦の詔勅を拝受し、潔く戦闘を中止し、和平の世の中に復帰する秩序正しい行動をしました。

しかるに、ソ連は、その後も連合国間で、東洋での発言権を得たいだけの政治的野心のため、尚も二週間にわたって矛を収めようとしている我が軍に対し執拗に攻撃をし続けました。既に戦いを終わらせる気持ちを固めている軍人、軍属、民間の日本人は、そのため過酷な立場に直面することになりました。将兵のみならず看護の職に従事する女性、一般市民、開拓団員の人々にも、次々と悲惨な運命が降りかかって来ました。その結果、多数の人々がどれほど無念の思いで最後を迎えられたことでしょうか。誠に胸の裂ける思いです。

振り返れば、65年前の今頃は、不法に抑留された日本の将兵が、東はカムチャッカ、西はヨーロッパ、ロシアまで広く移動して酷寒の冬に直面しようとしていた時期でした。

無責任なソ連は、抑留者の住居さえも用意せず、抑留者は自ら住む家を作り、食料もろくに準備していない環境で、当面自らが持参した糧食で一時期を凌ぐ状態でした。

酷寒の中で待遇は遅々として改善されず、極めて粗末で少量の食料の下での労働は、抑留者の体力を徐々に奪って行き、やがては栄養失調に倒れる者が続出しました。それに加えて洗浄不良の野菜からの寄生虫に蝕まれ、最後は発疹チフスの大感染のため、多数の人々が死の淵に追い込まれる事態に至りました。収容所内の僅かな病院施設と殆ど欠乏状態の医薬品では、少数のベッドは忽ち満杯となり、手の施しようもない有様で、まるで市場に並べられた鮪の列のように、板張りの床の上が隙間なく瀕死の病人で埋め尽くされる状態になりました。このような惨状の中で、次々に多くの人々が、終戦により家族と共に平穏に暮らす筈の故郷の地を狂おしい程思い詰めながら、この不条理な死を納得することが出来ないままに息を引き取って行きました。

御霊の皆様と共に苦しみを分け合った私達は、この事が半世紀以上も前のこととは到底思えず、つい最近の事のように鮮烈に身に染み込んでいます。

今日、この墓苑に集い、皆様にお会いするのは、戦友、友人達だけではなく、皆様の二世、三世の方々、皆様の遺骨を一日でも早く少しでも多く望郷の想いの地に帰って戴くために献身的な努力をした人々です。今、皆様は大勢の熱き心に囲まれています。故郷の地の豊かな発展を願いつつ、我らの祖国の未来を信じて先立った皆様、安心して下さい。皆様と共に、私達は美しい日本を強く築き上げて行く決意を持ち続けています。

毎年、この墓苑で、御霊の皆様とお会いしてお話をしましょう。どうぞ楽しみにしていて下さい。

平成二十二年十一月三日

菊谷　達禰

○第14回ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭式次第

開式　東京ヤゴダ会事務局長杉村俊一

司会進行　日本青年遺骨収集団　高橋亜希奈

国歌斉唱　参列者全員

黙祷　国の鎮め　吹奏

読経　「仏説阿弥陀経」

導師　遺族　梶原佑倖

追悼の辞　日本青年遺骨収集団　藤浪達哉

慰霊の言葉　抑留経験者　鹿児島大学名誉教授　菊谷達禰

奉納演技

吟詠「御製」「異国の丘」　紫水流師範　松岡紫乃静

謡曲「鉢の木」　喜多流　尾山喜一

歌謡曲「哀愁のシベリア」　遺族　丘とみ子

ギター演奏「涙雨」　遺族　山登　靖

挨拶　東京ヤゴダ会　会長　茨木治人

献花　参列者全員

斉唱「北斗星」　参列者全員

閉式　東京ヤゴダ会　役員　岡田信雄

○昭和天皇御製

国のため　命捧げし人々の
　ことを思えば　胸せまりくる

源　八岳

○異国の丘

誰が唄ふか　遥かに聞こゆ
　異国の丘に
哀調綿々　望郷の情
北風に身を削る　同胞の歌
烏拉山辺　日没の天
耐え忍んで　斃る勿れ　異国の丘に
故郷　肉親　君を待つこと久し
友を励まし又も唄ふ　異国の丘
歌声天に通じて　鬼神をも泣かしむ

今、何を語らん

表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団」（平成20年度に改名、ただし、登記上は「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」と表示、英文表記は「Japan Youth Memorial Association」略称「ＮＰＯＪＹＭＡ」）の年次活動報告書の題名であるが、同法人では、昨年8月に、平成21年度の活動（派遣）報告書を発刊した。その発刊の辞の中で、学生代表（青山学院大学）中村貴洋君は、「…私たちＪＹＭＡは、平和のために多くの犠牲を払われた先人の方々の志を常に忘れず、精進して参りたい所存でございます。また戦後日本の復興にご尽力なされた方々の血を引き継ぐ者として、過去を学び、今の世代から次の世代へと伝承していかなければならないと思っております…」と決意を述べておられる。誠に頼もしい若者達である。

なお、平成21年度においてＪＹＭＡは、厚生労働省並びに各関係諸団体との協力態勢の下、先の大戦の激戦地又は強制抑留地等の8地域、12次にわたる遺骨収集政府派遣に、延べ35名の学生と青年を派遣し、四九三五柱の戦没者・抑留中殉難者の御遺骨を祖国へお迎えし、氏名が判明しなかった三九三七柱の御遺骨を昨平成22年5月31日に千鳥ケ淵戦没者墓苑に納骨することができたとのことである。また、同法人の発行する月刊機関紙『遺烈』第128号（平成22年11月1日発行）には、平成22年度の政府派遣第二七一次モンゴル派遣隊員及び第二七二次ロシア沿海地方派遣隊員の感銘深い報告記事が掲載されているので、今回もご了承を得て、その一部を転載させていただいた。また、同法人事務局長から後掲のとおり、御丁重なるお礼状を頂いているので紹介させていただきます。

◇　◇　◇

【第二七一次モンゴル派遣隊報告文】

戦争を現在の問題として考える

青山学院大学四年　五十嵐　誠人

私が今回の派遣に参加させていただいた目的は二つある。一つは、今日の日本の繁栄、ひいては私の平和な日常を遺してくれた英霊の皆様に、遺骨収集を通じて感謝の思いを形にすることである。もう一つは、当時と何ら変わっていないと思われる現地の風景や御遺族の方々との関わりを通じて、戦争というものを理解することにつながる何かを得ることである。

私は、16年間の教育課程の中で、戦争について学んできた。大学においては、国際政治学を専攻し、世界各地の紛争の類型及び歴史を学んだ。しかし、そのいずれの瞬間にも、私は戦争を、自分の問題として、リアルな感覚を持って考えることはできなかった。戦争とは、遠い地のもの、あるいは過去のものでしかなく、学びを深めるにつれ、その事実を不甲斐なく感じるようになった。社会に出る前に、前記二つの目的を果たしたい。この思いが高まり、今回の派遣に参加させていただいた。

活動の成果を申し上げると、今回の派遣によって六柱の御遺骨をお迎えし、事前の調査において出土していた八柱と合わせて、計十四柱の英霊の皆様を日本にお連れすることができた。第一の目的については概ね達成できたと考えている。

第二の目的に関して、二点感じたことがあるので記したい。

まず、一点目は、戦争の永久性についてである。当地には、三千柱以上の御遺骨が未だ眠っており、遺骨収集は今後も続いていくと思われる。実際の戦闘は71年前に停戦したが、当地に英霊の皆様が眠り、それを思う御遺族の方がおられる限り、戦争は永久に終わらないものなのではないか、と考えた。これらは、実際の英霊の皆様のお姿や御遺族の方々のお話に触れて初めて想起できたものだと思っている。

もう一点は、私と御遺族との間に存在する、英霊の皆様に対する想いの差である。御遺族の方が御遺骨を焼骨した際に、残った灰を日本海に通ずるハルハ河に流したいと仰ったときと、「（遺骨）調査という言葉は、どうにも好かない」というお話を伺ったときに強く感じた。正直、私はその感覚をほぼ完全に持ち合わせていなかった。

私は、戦争を経験していない。このため、戦争については、今の日本の平和や御遺族の方々を通じてしか理解をすることができない。戦争や、英霊の皆様について考えるには限界がある。御遺族の方々の切実な想いを伺っていると、逆に、変に類推をして勝手な意見を持つのは失礼なのではないかと思えた。この考えについては、今後も熟慮の余地があると思っている。

以上を踏まえ、今後どうしていくかについて、二点記したい。

一点目は、戦争を現在の問題として

捉え、考えていくということである。今回の派遣で、戦争を、御遺族の方々や英霊の皆様、当地の環境を通して考えることはできるようになったと思える。それが自分の感覚、リアルな感覚では有り得ず、それは恐らく実際の戦争を経験しないことには獲得できないものであるとは思うが、今までの自分にはなかった新しい視点であることは確かなので、これをもって現在の世界の戦争、及び未来について考えていくことはできると思っている。しかし、戦争とは時代の問題であり、私一人が考えていたところで何らの意味はないと思われる。よって、相当数いると思われる戦争に無関心な若者に関心を持ってもらうことも、同時に行っていかなければならない。これが二点目である。以上二点について、残り半年の学生生活、その後もできる限り、積極的に取り組んで参りたい。

【第二七二次ロシア沿海地方派遣隊報告文】

小さな語り部

法政大学四年　藤浪　達哉

「悔しくて涙も出ない。一緒に頑張ろうと言っていた戦友が、次の日には亡くなっている。日曜の休みになるまでお墓を作って上げることすらできない」。抑留経験者である遠藤さんがおっしゃった言葉である。私はこの言葉が今派遣で一番印象に残っている。

派遣に参加する前に、抑留経験者の方からお話を聞く機会があり、マイナス三十度という過酷な生活の中で、森林伐採や鉄道を作られていたこと等を教えていただいた。しかし体験談は私にとって現在とのギャップが激し過ぎて実感が湧いていなかった。沖縄での遺骨収集の際にも感じたが、林の中に今もなお日本人が埋葬されている、ということが信じられなかったのだ。

収集地は粘土質で硬く、重機で当時の地層近くまで掘り進めてからスコップを使った。御遺骨の多くはボロボロに風化しており、肋骨や指の骨はもう土に還ってしまっていた。この地は野戦病院跡ということで、集団埋葬が多く見受けられ、一箇所から南を向いた多数の御遺骨をお迎えすることができた。旧ソ連の資料では二百五十二柱の御遺骨が埋葬されているとのことだった。今派遣は百十九柱の御遺骨をお迎えすることができた。現地で行った焼骨式、追悼式では、未だに日本に帰ることができない百三十三人に申し訳ないという気持ちで一杯になった。そして、もう収集ができないほどに風化してしまっている御遺骨があるかもしれないという話も聞いた。それならばもっと早く、十年早く来ていれば…。そして、これからの遺骨収集に力を入れないといけない、という強い気持ちに駆られた。

収集が終わり、抑留経験者の遠藤さんが実際に強制労働をさせられていたイマン川に行った。遠藤さんはそこで何を思ったのだろうか。涙を流していた。私には到底想像することができない。

昼食や休憩の際に、当時の事を色々と教えてもらった。しかしやはり、戦争を経験していない私達は当時の環境を想像するのにも限界がある。私は無理に抑留者の気持ちを想像することは必ずしも正しいとは思わない。私達は経験者からお話を聞き、それを後世に伝えていくことをすれば良いのだと思う。

私は今回の遺骨収集を終え、戦争に無関心な若者に対して、説得力を持って伝えられるのではないかと感じた。戦争や慰霊事業に多少興味を持っていたとしても、実際に行動に移そうと思っている人は少ない。そういった人達に、アプローチしていくには、何か行動していないとなかなか発展していかない。一人ひとりが小さな語り部として伝えていくことが重要なのではないだろうか。

最後になりましたが、派遣団の皆様に良くしていただき、また、御指導して下さり、無事に帰還することができました。本当にありがとうございました。

避けられない風化

フェリス女学院大学四年　中山　亜理紗

「何故、君は遺骨収集をするの。遺族でもなければ、ましてや戦友でもないのに」。派遣半ばの夕飯の時に、突然遺族の方の一人に聞かれた。今まで私は二度沖縄の自主派遣に参加し、今回初めて政府派遣であるソ連抑留中死亡者沿海地方遺骨収集に参加した。自分なりに思いがあって活動しているつもりだったが、抑留経験者や遺族の方たちと共に行動している中で、その方々に比べて私の言葉など薄っぺらで前述した問いに表面的に繕ってしか答えられなかった。

今回の活動地域は、ウラジオストクから北へバスで9時間ほど移動したダリネレチェンスク地区の第八十五特別

野戦病院ガルボフカ村であった。病院跡地だからなのか、一箇所に多数の御遺骨が埋葬されていた。今までの埋葬地では日本の方向に頭を向けて横線に五体ずつ綺麗に並べられ、一区画に二十五体で発見されることが多いと他の派遣に行った方達から聞いた。しかし、ここでは積み重ねてあったかのように何体もの御遺骨をお迎えすることがあったりして、どれだけ酷い惨状であったかが窺える。

口が大きく開いた頭蓋骨をお迎えした。人間の体は死後二時間経過をしたら、どんなに力を入れても筋肉が硬直して動かなくなる。苦しみで叫びながら、口を閉じられることもなく、埋葬されたのだろうか、と想像してしまった。また、薬品などが使われていたせいか、60年以上経った土を掘り返しても、独特な臭いを感じた。しかも、この地域は湿地帯で土が粘土質なので、お迎え出来ても、外の空気に触れた瞬間、崩れ去ってしまい、風に吹かれてしまうことがあった。祖国から遠い地で、時と共に風化して、土と一体化してしまった御遺骨が幾つもあり、その前にお迎え出来なかったのか、と考えさせられた。

ソ連抑留について、本やテレビでは多少知っていたが、その証人でもある抑留経験者の遠藤尚次さんと同じ派遣団で色々なお話を聞くことで、国際人権法違反も甚だしいことが実際に起きたのだと実感することが出来た。

戦争が終わり、ソ連兵に「トーキョー・ダモイ（帰国）」と騙されて、船に乗せられ、列車に一車両五十人が押し込められ、零下四十度のシベリアに連れて来られたのである。そして、奇しくも一番初めに降り立った地が、今回の活動地域のすぐ近くのイマン川であった。この地域に来るのは初めてで、六十五年振りに訪れる瞬間を共有出来た。何を思ったかは計り知ることはできないが、感慨深い気持ちになった。

引渡し式、無意識に涙が溢れて止まらなかった。全国から集まった御遺族が献花している際、杖を突きながら、涙ながらに「ありがとう」と言って下さる方が何人かいて、更に涙が出た。

私は何故、遺骨収集をしているのか。テレビや教科書では解らない事を知り、貴重な経験をしただけで終わらせてはいけない。それを、周りから少しずつでも伝えていき、それが、風化を止めるための一因ともなり、遺骨収集を続けて、世界中に散らばっている御遺骨をお迎えしていくことが答えなのではないだろうか。

多くの人に支えられての派遣であった。準備をしてくれた仲間、派遣でお世話になったロシアの方、無知な私に丁寧に色々なことを教えて下さった派遣団の皆様に感謝し、報告を終わらせていただきます。

◇　◇　◇

平成二十二年九月吉日

特定非営利活動法人
ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団
事務局長　宇都宮　大起
（拓殖大学四年）

財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
理事長　柚木　文夫　様

この度は、当法人の年次活動報告書『今、何を語らん』平成二十一年度版に賛助広告を寄稿下さり、誠にありがとうございました。御入金を確認いたしましたので、領収書をお送りいたします。

本年度の遺骨収集は、三度の派遣を終え、目下、ロシアは沿海州地方における遺骨収集が行われております。七月に実施されました第一次硫黄島派遣には長妻昭厚生労働大臣が現地視察に訪れ、硫黄島に於ける遺骨収集を一層進めるべく、菅直人首相は力を入れることを公言し、厚生労働省も来年度以降の硫黄島に於ける遺骨収集に特命チームを設立し、注力する見込みのようです。

国の為に散華し、今なお草蒸す屍となっていらっしゃる英霊の御遺骨を収集することに力を入れるということは、遺骨収集に関わっている身としては、喜ばしい限りでございますが、同時に硫黄島での遺骨収集に力を注ぐ余り、他地域に於ける遺骨収集はどうなるのか、という不安を感じております。官房長官である仙石氏は、他地域に於ける遺骨収集も検討するとのことなので、期待したいところでございます。しかし、遺骨収集もまた、慰霊顕彰の取組みの一つであることを頭に入れ、靖國神社に参拝を行い、英霊に頭を垂れ、感謝するということも徹底して頂ければと存じます。我々は、次世代を担う若者であり、戦後六十五年という節目に、今一度思うことは、英霊の死が決して無駄ではなかったという日本を築き上げる、そう強く思う所存でございます。その為にも自己研鑽を忘れず、両親に孝行を尽くせる日本人でありたいと存じます。

私は残念ながら、大学四年生ということもあり、ＪＹＭＡの活動に全力で取り組むことも残り半年ばかりでございますが、今後とも学生を始めとした

青年層は、変わらず、遺骨収集を始めとした慰霊顕彰に取り組んでいくはずです。どうぞ、今後とも当法人に対し、変わらぬ御支援、御鞭撻をお願い申し上げます。

第39回全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式

当協議会の正会員団体である「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会」（会長　神藤光雄氏）では、平成22年11月3日、同慰霊碑前において、「第39回全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式」を例年どおり斎行された旨、同奉賛会会長から、お便りに添えて、追悼式の式次第、慰霊碑の沿革、写真等をお送りいただきましたので、次に掲載させていただきます。

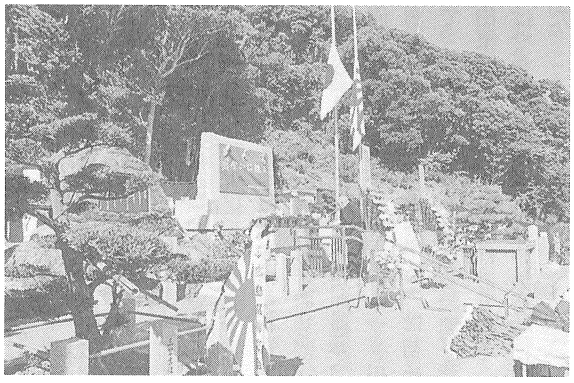
なお、同慰霊碑の由来等については、当協議会会報『慰霊』第13号掲載の「協議会参加団体の紹介⑪」（5～8頁）を参照して下さい。

「菊花の薫る季節　平素は大変お世話になっております。遠方のためご無礼をお許し下さい。さて過日のお電話の件では、大穂様より第39回全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式の概要についてはお聞きのとおりです。

近年特に会員の高齢化に伴い、逝去及び体調不良の方が多く、会への出席も極めて悪くなっております。今回は御来賓32名、会員150名の参列となりました。今後の式典について、理事会でも何度か協議しまして、地元の伊良湖神社に移管する方向で進めております。伊良湖神社は伊勢神宮と近い関係があり、古き伝統と由緒ある神社です。そのような関係で、今回は地元自治会と氏子総代役員を御招待して式典を行いました。

いずれにしましても、私達の総会を済ませてから、次年度以降、移管手続きをしたいと思っております。

式典の写真と資料を同封しましたので、よろしくお願い申し上げます。」



全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式

○第39回全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式

式次第

平成22年11月3日13時より

司会　奉賛会事務局　河合武彦

1　始めの言葉　奉賛会副会長　冨田　明治

2　国旗・軍艦旗掲揚　渥美海洋少年団

3　黙祷

4　これより神職による祭祀を執行。
　修祓　一同起立
　斎主　一拝（全員一拝）
　献饌
　祝詞

5　式辞　式典委員長　糟谷　勝美

6　慰霊碑賛歌　（テープを流す）

7　祝電　披露

8　玉串奉奠　斎主以下御来賓の順
　献花　戦友代表　安藤　哲
　会の代表及び一般参列者の献花

9　主催者謝辞　奉賛会監事　鈴木　恒夫

10　撤饌　斎主　一拝（全員一拝）

11　国旗・軍艦旗降納

引き続き一般参列者献花を行う。

司会　以上をもちまして式典を終了致します。

○伊良湖岬慰霊碑の沿革

この慰霊碑は当初太平洋戦争機動艦隊戦没者の慰霊碑として企画された。昭和41年11月、旧海軍最後の連合艦隊司令長官小沢治三郎中将が逝去され、その葬儀後、天皇陛下から下賜された祭祀料が未亡人から機動艦隊生存者の会「潮会」に寄贈された。同会はこの御下賜金を基金として慰霊碑を建立することにした。

そこで、日本列島の中央に位置して太平洋を一望する、渥美半島先端の伊良湖岬が建設地に選ばれた。同地は国定公園内であり、国と県の許可や地元自治体、住民の同意を得るために植田九一氏（海軍主計中尉、豊橋市議）は神藤光雄や糟谷勝美らと奔走した。昭和47年11月、桑原幹根氏（当時の愛知県知事・全国知事会長）の揮毫による碑文「君今ここに甦る」の慰霊碑が完成した。

昭和47年11月3日　慰霊碑建立、除幕式執行。

昭和48年10月20日　高松宮宣仁親王殿下御台臨の下に慰霊祭執行。

昭和49年10月27日の慰霊祭から、こ

の碑の碑名を「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑」と改称し、陸、海、空、民間を問わず、御遺族、戦友の御希望によって、広く合祀希望者を募り、戦没者の芳名簿を収納合祀し、慰霊祭を執り行うこととなった（合祀者数は、平成9年11月の第26回追悼式現在で、二万六百五十三柱であり、慰霊碑にはその英霊芳名簿が収納されている）。その後毎年、11月3日に慰霊祭を執行することになった。

昭和51年11月3日　三笠宮崇仁親王殿下御台臨の下に、第5回慰霊祭執行。

昭和56年10月10日　高松宮宣仁親王殿下、同妃喜久子殿下御台臨の下に10周年記念慰霊祭執行。

昭和57年11月3日　高松宮妃殿下御下賜の歌碑『わだつみの千尋の底に沈みつつ眠れる君等偲ぶ石ぶみ』建立、除幕式。

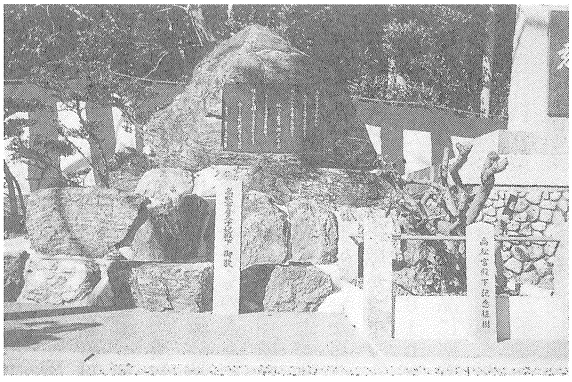
平成3年11月3日　20周年記念慰霊祭に高松宮妃殿下御歌御下賜

平成4年11月3日　高松宮妃殿下御下賜の御歌『惜しみても惜しみてもなほあまりあり今しこの世に君等ありせば』の歌碑追加建立

平成8年11月3日　三笠宮殿下御台臨の下に、25周年記念慰霊祭執行。

平成22年11月3日　第39回慰霊祭斎行。

以　上



高松宮妃喜久子殿下御歌碑

「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会」事務局

〒441―8033

愛知県豊橋市入船町九六―二

神藤株式会社内（会長神藤光雄）

TEL（0532）―46―7788

FAX（0532）―46―7789

事務局からの報告等

一　平成22年度第2回評議員会（臨時）及び同理事会（臨時）の開催

千鳥ケ淵戦没者墓苑・会議室において、11月4日（木）に評議員会を、同5日（金）に理事会をそれぞれ開催した。

本会議は、山本卓眞会長出席の下、事務局からの提議について熱心な討議が交わされた。その結果、事務局案はそれぞれ原案どおり承認された。

1　評議員会（臨時）

ア　議案

①　第1号議案「役員人事・監事の異動」

・　新任監事の選任

②　第2号議案「新法人移行認定申請書類（その一）」

・　新申請書類の全般構成（報告）

・　法人の事業一覧・個別事業の内容（案）

③　第3号議案「新法人移行認定申請書類（その二）」

・　新定款（移行後の変更案）

④　第4号議案「新法人移行認定申請書類（その三）」

・　新法人の役員等候補者名簿（案）

イ　出席者及び議長

評議員14名全員（委任状3名を含む）、他に山本卓眞会長、事務局から柚木文夫理事長、若木利博理事が出席した。

ウ　議長―野口清秀評議員

2　理事会（臨時）

ア　議案

評議員会に同じ。

イ　出席者

理事12名中11名（委任状3名を含む）が出席した。

二　協議会参加団体の活動状況

1　JYMAの遺骨収集活動報告（別掲参照）

2　全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊祭（別掲参照）

3　東京ヤゴダ会（別掲参照）

三　慰霊祭等への参加状況

平成22年度千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭

当協議会から、柚木文夫理事長が参列し、事務局長が慰霊祭を支援した。

四　賛助会員からのお便り等

当協議会の賛助会員である藤田豊氏（元第三十七師団司令部付陸軍大尉・陸士将4期―54期相当・「ナコン碑三七奉賛会」事務局長他）から次のようなお便りを頂戴した。同氏の編著になる力作『ナコンナヨークの碑（いしぶみ）―第三十七師団慰霊碑秘話―』については、当協議会会報『慰霊』第9号（平成20年4月1日発行）に、

その大要を掲載して紹介したところであり、また、昨年4月7日、靖國神社で斎行された「平成22年度戦没馬慰霊祭」記念の栞『軍馬慰霊二題―栄光と悲惨―』（偕行社援護委員会編）にもその一部が掲載され、慰霊顕彰に思いを寄せる多くの人々に感動を与えたところであるが、慰霊顕彰と日タイ親善のために少しでも役立てばとの同氏の強い願いから、NPO法人日本自費出版ネットワークが募集した「第13回（2010年）日本自費出版文化賞」作品に応募したところ、応募総数641点（地域文化、個人誌―自分史・一族史・追悼集・遺稿集・旅行記・闘病記・趣味など、小説・エッセイ、詩歌、研究・評論、グラフィックの6部門）、うち個人誌部門の一次選考を通過したが、二次選考による入選作品にはならなかったとのことであった。誠に残念ではあるが、同法人では、入賞・入選・一次選考通過作品を、同法人のホームページに掲載するとのことである。なお、次に掲載するお便りは、一次選考通過時のものである。（NPO法人日本自費出版ネットワーク事務局・東京都中央区日本橋小天馬町7―16・TEL03―5623―5411）

「謹啓　盛夏の候　英霊に御奉仕、邦家のため大慶の至りに存じます。

一　「ナコン碑」の小さなニュース

1　拙著『ナコンナヨークの碑（いしぶみ）』を応募したところ、一次選考通過の知らせを受けました（別紙）。

2　拙著は、慰霊顕彰と日タイ親善を祈って書いた小戦記です。

二　靖國神社に参詣しない不埒（ふらち）で情けない菅内閣の時代、拙著の『慰霊戦記』を取り上げて下された選考委員諸先生の見識と英断を嬉しく思っています。

諸先生の英断こそ、ここに「日本人あり」と感動しました。

これは英霊の御加護と信じています。

三　英霊の顕彰は、天の啓示だと思い、平常心で最終決定を待っています。素より入賞の可否は天運です。「英霊を、少しでも日の当たる高い所に掲げたい」

これが、応募した私の希望です。もしも入賞したら山本会長先生に御報告いたします。飯田正能様によろしくお伝え下さい。本件は、最終決定の九月下旬まで伏せておいて下さい。私は、三本足ですが、気持ちだけは健在です。

敬白

平成二十二年八月二十日

〒261―0011
千葉市美浜区真砂2―15―1―1218
ナコン碑三七奉賛会事務局長
藤田　豊
（TEL・FAX〇四三―二七八―七六五五）
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
理事長　柚木　文雄　様」

新入会員及び寄附者（敬称略）
（9月1日～11月30日）

【正会員】

陸士五十三期生会
（代表幹事　西宮　正泰氏）

【特別会員】

（株）防衛システム研究所
（代表取締役　松島　悠佐氏）

【寄附者】（あいうえお順）

長内　義臣　芳賀　誠治
西村　明　田中　公二
松永　忠範　山本　健雄
岩宮　具子

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一　賛助会員
（本会の趣旨に賛同する個人）
年会費　三〇〇〇円

二　賛助特別会員
（特別ご芳志の賛助会員）
年会費　五〇〇〇〇円

三　正会員
（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）
年会費　一〇〇〇〇円

四　特別会員
（本会の趣旨に賛同する法人・団体・企業）
年会費　五〇〇〇〇円